

第27話 坂上田村麻呂の蝦夷平定

さかのうえ たむら まろ え ぞ へいてい
たびたび叛いては服し、服しては叛いた蝦夷も、坂上田村麻呂の征伐で全くその巢窟
くつがえ を覆 されて、その後は襲来するというようなことが殆どなくなった。

北の蝦夷と東の蝦夷

さいめい みよ あべの ひらふ え ぞ せいばつ からふと たい
齊明天皇の御代に、阿倍比羅夫が日本海方面の蝦夷を征伐して、遠く北海道から樺太の方まで平らげ
てからは、この方面の北の蝦夷はおとなしくなって、よく朝廷の命令に従いましたが、太平洋方面の東の
蝦夷は、奈良時代になってからもたびたび乱を起こして、内地のわが民を襲って来たりした。

勿論、そういう場合のためには、それぞれ必要な土地にふだんから役人や兵士を置いて備えてはあつ
たのですが、蝦夷の勢いが強く、乱が大きくなった時には、それだけでは容易に鎮められないこともあり、
朝廷はその度毎にわざわざ征討の軍を都から発せられた。けれども、はるばると遠く離れたところから、
兵士や糧食を送るのに手間が取られて、いつも迅速にはその功を奏することが出来なかった。
のみならず、漸く征伐して、一時は鎮まっても、官軍が引き上げると直ぐにまた乱れるというのがこの
蝦夷のならいでしたから、これにはいつも頗る困ったのであります。

多賀城と秋田城

しょうむ た が せんたい きづ しず こんきょち はる
聖武天皇の御代に、多賀城を今の仙台の北方に築いて、これを東部を鎮める根拠地となし、遥かに
出羽の海岸に在って西部を鎮める根拠地となっていた秋田城と連絡をとるようにしました。 それでもま
だ十分には平定ができませんでした。 その後、こうにん そむ はけん
光仁天皇の御代にも、蝦夷は叛いて、朝廷から派遣にな
っていた役人を殺したりしました。

かんむ ありさま そくい
桓武天皇は、その頃、皇太子でしたので、この有様を見てご心配になりましたが、ご即位になると、
ご遷都という大事業をなさると共に、蝦夷の征伐をも思い立たれた。 しかし、第一回の征討軍は、大將
が偉くなかったためにその功を収めることが出来なかった。 第二回の時の副将軍であり、第三回の時
の大將軍であった さかのうえ たむら まろ い およ ほん かんぜん やばん そうくつ くつがえ
坂上田村麻呂が出づるに及んで、殆ど完全に野蛮な蝦夷の巢窟を覆 して、その後
には、なが そむ
永く叛くことのないようにしました。

坂上田村麻呂

さかのうえ たむら まろ おうじん おおぜい つ あちのお み しそん
坂上田村麻呂は、応神天皇の御代に大勢の部下を連れて中国から帰化した阿知使主の子孫です。
かりたまろ と共に朝廷に仕えていたが、生れつき武勇に秀でたので聞こえていました。 身の長は五尺
八寸、胸の厚さは一尺二寸（1尺は30 cm）、体の重さは32貫（1貫は3.75 kg）もあって、力は飽くま
でも強く、め たか ごと するど ひげ いか み は もうじゅう おそ
眼は鷹の眼の如く鋭く、髯は金の糸をかけたようで、怒った時に眼を見張ると猛獣も恐れて
たお わら こども だ
倒れ、笑うと小児もなついて抱かれたといわれている人です。

えんりやく どうばつ え ぞ いくさ
彼は延暦13年の第二回の討伐軍には、副将の一人となって蝦夷に向かったのですが、非常に軍が
じょうず ぶ か
上手で、部下の兵士を自分の手足のように自由に動かしたことから、これまで官軍の大將といえは軍は

下手なものと思っていた蝦夷は大いに恐れて、陸奥の奥に逃げ込んだ者が多かったのです。

それで、延暦20年の第三回目に、今度は彼が征夷大將軍に任ぜられて、四万の将士を率いて陸奥に下った時には、既に彼の強い事をよく知っていたので、蝦夷は戦わない前から陸奥と出て降りました。

胆沢城と志波城

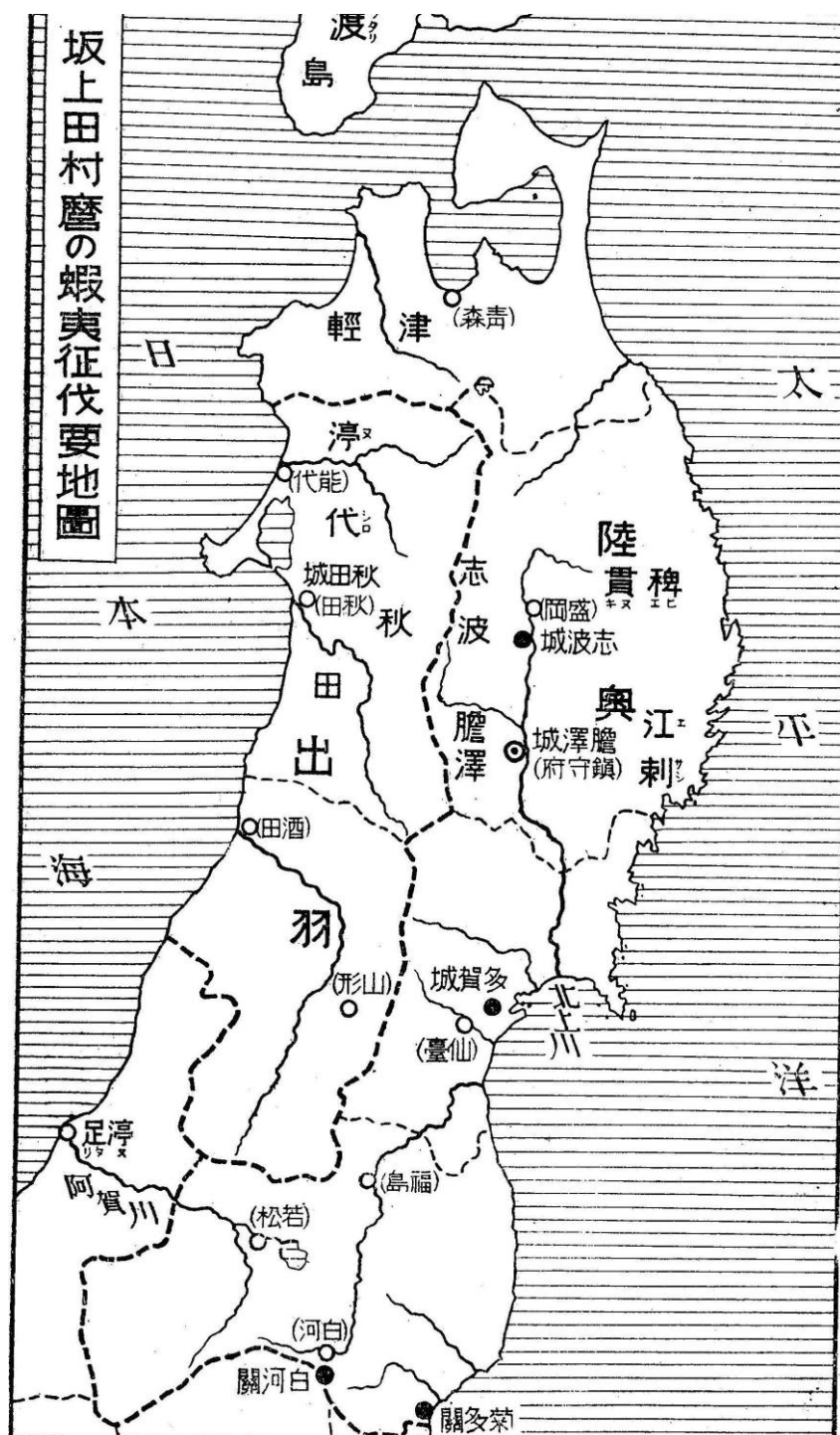
彼は降るものはこれを許し、従わない者は討って滅ぼしながら、どこまでもと深く進んで、翌21年正月には、今の陸中国(岩手県)胆沢郡宇佐村に胆沢城を築いて、これまで多賀城に置いた本営をそこに移した。この地は東に北上川の大河が流れ、北の方からは胆沢川が流れて来て北上川に注ごうとしていて、極めて要害の地でありました。

次の年には、田村麻呂は、更にまた北上川の上流に進んで、今の陸中国紫波郡古館村に志波城を築いて蝦夷の来襲に備えた。胆沢城からは十里余も北に位したところで、ここもまた北上川がその岡の下をめぐって流れ、非常に要害の地でありました。

斯うして田村麻呂は奥へ奥へと進んで、ぢりぢりと蝦夷を圧迫したので、ついには、彼らはいどころがなくなって、みんな降参して出てきました。すると、田村麻呂は深切にこれをいたわって、手向かう者は用捨なく討って滅ぼすが、なついて来る者はどこまでも保護してやるのが、朝廷の昔からの御方針であるということを、よく分かるように彼らに説いて聴かせたので、その後は永く蝦夷もすなおに服した。

これまで叛いては服し、服しては叛いて、長く朝廷にご厄介をかけた蝦夷も、ここに全く平定して、皇威は陸奥の奥深くにまで及んだのです。これというのも、一つは御英邁であった桓武天皇のご威光によることは勿論ですが、一つはまた智にも仁にも勇にもすぐれた田村麻呂の功績であったのです。

田村麻呂の墓



第27話 坂上田村麻呂の蝦夷平定

田村麻呂は、その功に依って官位も次第に進み、第51代平城天皇の御代には中納言に任ぜられ、近衛大将を兼ねたが、後、更に進んで正三位大納言となり、第52代嵯峨天皇の御代に54歳で亡くなった。

天皇は非常に惜しませられて、一日の廃朝を仰せ出された。廃朝というのは、天皇が政治をお休みになることでして、臣下の者では余程の大功を立てた者の亡くなった場合でなければ、仰せ出されることはなかったのです。

なお天皇は、田村麻呂に従二位を贈られ、平安京に近く、山科の地に墓地を賜って、厚く葬らしめたが、その時に、屍に甲冑を着せて平安京に向かって立たせ、その棺の中には武器や兵糧をも併せて入れしめたということです。これは、死しての後も、永く皇城を守るようにとのおぼしめしでしたのでしょう。

既に天皇がこれほどにご信頼を寄せられたのですから、その後、将軍となって征伐に出かける人は、いつも此の墓に詣って勝利を祈ったというが、いかに後の世までも長く田村麻呂の功績が仰ぎ見られたかが分かるではありませんか。その墓は今も山城国宇治郡山科村栗栖野（京都の東南4km余りのところ）に在ります。

（第27話 坂上田村麻呂の蝦夷平定 終わり。 次は一旦前頁に戻り、

第28話 伝教大師と弘法大師 へ）